

〈博物館特別展〉

特別展「祈りと造形—韓国仏教美術の名品—」の開催に寄せて

学芸員・教授 宮崎 健司
(日本古代史)

大谷大学博物館の2009年度特別展「祈りと造形—韓国仏教美術の名品—」が、10月13日(火)から11月28日(土)まで、韓国・東國大學校博物館をはじめ、大阪市立美術館・大阪歴史博物館・京都国立博物館・高麗美術館・泉屋博古館・奈良国立博物館・浄教寺・禅林寺・知恩寺・大念佛寺・南禅寺・長谷寺・不動院・廬山寺など各位の協力のもとで開催された。

今回は、かねてより学術交流協定を結んで留学生交換などで交流をすすめていた東國大學校の博物館と本館が2007年に締結した博物館交流協定に基づく、共同開催の展覧会であった。東國大學校は韓国でもっとも著名な仏教系私立大学で、付属博物館は多くの仏教美術の名品を所蔵することで著名である。

本館での海外作品の展覧会は2005年度特別展「ファウスト—フランクフルト・ゲーテ博物館の名品—」以来、2度目となるが、前回の展覧会がフランクフルト・ゲーテ博物館による展示企画であったのに対し、今回は展示企画の段階から東國大學校博物館と協議してすすめたもので、その意味においてはじめての本格的な海外作品展であったといえ、本館にとって、その意義は深い。

展覧会の内容は、東國大學校博物館の所蔵品を中心として、日本国内に所蔵される作品を補い、韓国仏教美術の名品を紹介するものである。時代別に「Ⅰ三国時代～統一新羅時代」、「Ⅱ高麗時代」、「Ⅲ朝鮮時代」の三つのテーマで構成され、書跡・彫刻・絵画・考古遺物など重要文化財(日本)5点を含む64点の作品が展示された。

「Ⅰ三国時代～統一新羅時代」では、考古

遺物や彫刻を中心に書跡・拓本などが展示された。本館所蔵の重要文化財の一つ元暁述『判比量論』断簡も展示されたが、元暁の事績を知る上できわめて貴重な金石文である「誓幢和尚碑断片」(東國大學校博物館蔵)が出品され、展覧会の先頭を飾った。当該碑の大部分は韓国の国立中央博物館に所蔵されるが、本品は小片ながら当該碑の制作年代を9世紀代と確定する重要な資料である。また出品された7点の金銅仏は三国時代から統一新羅時代への変遷をうかがうことができた。

「Ⅱ高麗時代」では、絵画・書跡を中心に彫刻・考古遺物・工芸などが展示された。とりわけ絵画と書跡の優品が揃った。芸術的評価の高い高麗仏画は日本に遺存することが多いが、12点の重要作品が一堂に会した。重要文化財「阿弥陀如来図」(禅林寺蔵)や修理後初公開となった「毘盧舍那仏図(観音菩薩万五千仏像)」(不動院蔵)、ほとんど展示されたことのない「水月観音図」(奈良国立博物館蔵)などが展示されたことが特筆できよう。また書跡では現存最古の高麗写経の重要文化財『大宝積経』巻32や重要文化財『文殊師利問菩提経』(以上、京都国立博物館蔵)、版本大蔵経として著名な高麗版大蔵経の初雕本『御製仏賦・詮源歌』(南禅寺蔵)・再雕本(大谷大学図書館蔵)など、当該期の重要な写本・版本が展示されたことも興味深い。さらに気品ある容貌の「阿弥陀三尊像」や流麗な「小鍾」(以上、東國大學校博物館蔵)も展示に華をそえた。

「Ⅲ朝鮮時代」では、彫刻・絵画を中心に書跡・工芸などが展示され、日頃、日本では

展示される機会のあまりない朝鮮時代の仏教美術を紹介するよい機会となった。絵画では、大幅に鮮やかな彩色で群像として描かれる「三蔵菩薩図」や「地蔵菩薩図」(以上、東國大學校博物館蔵)が観覧者の目をひいた。いずれも寺院の本尊背後の壁面に掛けられるものという。彫刻でも脇侍に地蔵菩薩像を配する特徴的な「阿弥陀三尊仏龕」、優美な姿をした「菩薩立像」、彩色鮮やかでユーモラスな容貌を示す「文殊菩薩倚像」や「羅漢坐像」(以上、東國大學校博物館蔵)も注目された。

関連事業として、10月13日(火)に東國大學校博物館館長・崔應天氏「韓国三国時代の舍利容器について」、10月31日(土)に東國大學校博物館前館長・鄭于澤氏「高麗仏画の境界」、11月14日(土)に本学教授・鄭早苗氏「古代三国と倭」の3度の講演会を開催し、いずれも多くの来聴者が熱心に耳を傾けた。

今回の展示は、日本でもあまり紹介されることのない朝鮮仏教美術をおおむね通時代的に紹介するものとして国内で注目されたが、韓国メディアでも大きく報道された。その関係もあってか、きわめて多くの韓国からの来訪者が見うけられた。さらに大学教員、大学院生、韓国文化財庁・博物館の関係者など研究者の来館も目立った。大学院生の中には高麗仏画を2時間以上熱心に観覧する姿も間々見られた。

今回の展示は、海外との交流展として有意義な展覧会であった。また日本の大学博物館としては、今回のように韓国の大学博物館と交流協定を結び、展覧会を共催する事例は皆無にひとしく、一人本館のみならず日本の大学博物館にとっても記念すべき展覧会となったといえよう。

付記 鄭早苗先生におかれましては、去る2月4日に急逝されました。先生の訃報に博物館関係者一同たいへん驚き、ご講演いただい

たのが昨日のように感じられます。衷心より哀悼の意を表します。